学校化社会における子どものアイデンティティの危機

大脇康弘

1. 変わりつつある子ども——その正負

にこにこれっしゃ

ヤーヤー　ポッポー
ヘイヘイ　ポッポー
さあさあ　シュシュシュポッポー
ワクワク　シュシュシュポッポー
ゆけゆけ　シュシュシュポッポー
にこにこれっしゃだ　ポッポー
トンネルトトトトン　トントントトトトン
シグナルキンコンカンコン
キンコンカン　キンコンカン　それゆけー！

（中西一雄　作詞）

きしゃポッポ

きしゃきしゃ　ポッポ　ポッポ
シュッポ　シュッポ　シュッポッポ
ぼくらをのせて
シュッポ　シュッポ　シュッポッポ
スピード　スピード　まどのそと
はたけも　とぶとぶ　いえも　とぶ
はしれ　はしれ　はしれ
てっきょうだ　てっきょうだ　たのしいな

（宮原　薫　作詞）

今日、子どもは変化のなかにある。子ども同士でも、年齢が異なれば、その差以上に異和感をもつ場合があるといわれる。まして、大人は、子どもの感性・意識・価値規範に驚かされることが少なくない。本当に子どもが変わりつつあるとすれば、それはどのようなものとして捉えられるのであろうか。現時点で、この作業を行うことは意外に難しい。まずは、私の素朴なスケッチから始めてみたい。

冒頭に掲げたのは、内容が類似している新旧二つの歌である。「にこにこれっしゃ」は、NHKの幼児番組「おかあさんといっしょ」で歌われる子どもが大好きな歌の一つである。もちろん、振付けがついて体を動かしながら歌うものである。一方、「きしゃポッポ」は、自然と科学技術が調和していた古き良き時代からの愛唱歌である。年配者にとっては、子ども時代のノスタルジーとともに、ふと口ずさむ歌でもある。二つの歌は同じように、きしゃのスピード感・軽快感を扱っているが、前者は言葉遊びを多用して、感覚的・抽象的に表現しているのに対し、後者は叙情豊かな具体的描写が主となっている。前者を圧倒的に支持する子どもの感性に、何か時代を切り拓いていくパワーを感じるのは、私だけであろうか。

1970年代後半には、子どもの世界に複雑にプログラム化されたLSIゲームが侵入してきた。高価なインベーダー・ゲームは、ゲーム・ウォッチとして身近なものとなり、最近では、ファミコン・ゲームが急速に普及している。このLSI機器を抵抗なく受容しているのが、子どもをはじめとする若い世代である。古い世代は、取扱説明書を丹念に読んだ上で、パソコン・ワープロを使うのに対して、若い世代は、まずキーに触れて反応を確かめながら習熟し、ミスが出た時、取扱説明書の関連部分にあたるという具合である。ただし、このLSI機器が子どもの感性や思考にどのような影

響を与えるかは明らかではない。これに熱中して、他の活動が制約されたり、興味や関心が狭まるという間接的な影響は指摘できる。けれども、0と1だけのデジタル信号でパッパと処理するデジタル思考が、アナログ思考に取って替わるといえるだろうか。受験世代が○×の正誤的思考に支配されているという経験的判断が下せるほどに、今後顕著な傾向がみられるかもしれない。ただし、その背景には、情報化社会への大きな変動があると思われる。

ファミコンが少年に広まっているのに対して、丸字、マンガ字は少女に広く使われている。丸みを帯びた線の細い字体は、「はねるような明るさ軽さ、そして装飾志向と強い幼稚性」を感じさせる。[1] 山根一眞によれば、1974年にその字体が形作られ、1978年以後急速に普及し、1985年現在、女子中学生の55.3％、女子高校生の47.5％がこの丸字を書いていると推定される。[2] この事実の評価やその要因については論議の分かれるところである。「かわいい」という価値観に引きずられて、画一化された少女の心性を読みとって、否定的な評価を下すこともできよう。けれども、山根一眞が指摘するように、速書き・横書き時代の必然として創り出された「変体少女文字」で、21世紀の奔流になるとの推測も一考の余地はある。いずれにしても、子どもの変容の勢いというものを感ずるのである。

以上みてきた三例のように、現時点で評価を下すことが時期尚早な現象が多いなかで、子どもに対する危機意識をつのらせる現象はさらに多い。後に考察する子どもの様々な病理現象のなかでも集団いじめに典型的にみられる人間関係への忌避傾向、他者との交信能力の低下、リアリティの欠如、人権感覚の低さは大いに危惧されるところである。これは、ファシズムの心理的基盤となった権威主義的パーソナリティの増加にも連なっていく。子どもの病理や問題点を列挙するだけでなく、その本質を冷静な目で追求することが今日何よりも求められているのである。

2. 問題としての子ども

(1) 子どもを論ずる視点の問題――一つの危惧

子どもの急激な変化に、大人はとまどいを隠しきれない。かつては自明な存在であり、真正面から問われなかった子どもが、一大テーマとして浮かび上がったのは、1970年代後半のことである。その前史を辿れば、1960年代後半の＜怒れる若者＞の出現、それに続く1970年代の＜無気力な高校生＞の登場がある。そして、1970年代後半には＜病める子ども＞が社会問題となり、1980年代前半には＜荒れる子ども＞へと病理は低年齢化・一般化・深刻化してきたといえる。こうして子どもの問題に、マスコミをはじめ、国民大衆が広く関心をもつようになった。しかし、その問題の取り上げ方や論ずる視点は、必ずしも深まってきたとはいえず、むしろ危惧すべき点が多い。

第一に、今日の子どもをめぐる事象は複雑に絡み合い、その背景も多様であるにもかかわらず、単純化・パターン化して認識する単眼的思考が顕著である。ことに、いじめ、体罰、校内暴力に関わる事件を論じる際、加害者―被害者の図式で責任追求に終始したり、子どもの病理を特定の要因―母親、食事、勉強部屋に帰する傾向がみられる。マスコミのセンセーショナルな報道がこれを増幅しているのが実情である。多面的かつ柔軟に事象を見つめる複眼的思考が必要不可欠である。

第二に、次々に発生する現象の把握に追われ、子どもの全体像や将来像への視野の広がりが弱い近視眼的思考に陥りがちである。とくに、子どもの病理に視野が限定される傾向にあるが、それは子ども問題を解読する一つの重要な素材であるとの認識が必要である。また、様々な現象を同列に扱い、レベル分けが不十分である点も、認識の深まりを妨げている。先に述べたように、子どもが大きな変化のなかにあるとすれば、①一時的なものでやがて消滅する現象、②既にみられ、今後とも継起する現象、③新たに発生し、将来拡大していく現象を区分けしなければならない。それによって、問題の本質に迫る第一歩を踏み出せるのである。

第三に、現代社会が極めて不透明でのっぺらぼ

うとしたものとなり、将来を見通しにくいなかで、子どもだけでなく大人も生きにくい社会になっている。子どもを論ずることは、大人自身の生き方を問い直すことに繋がるが、子ども社会の問題は大人社会の直接的反映であると単純に論ずるべきではない。子ども社会は、大人社会から相対的に独立しており、子ども社会の再建の道を探ることが緊急の課題となっているのである。

(2) 課題設定

ところで、子どもとは何か。それは大人の対概念であり、日常用語でもある。人間の発達は、乳児期（0～1.5歳）、幼児期（1.5～6歳）、児童期（6～12・13歳）、青年期前半(13・14～16・17歳)、青年期後半（17・18～22・23歳）、プレ成人期（22・23～30歳前後）、[3] 成人期（30歳前後～60歳前後）、老人期（60歳前後～）に区分される。ただし、年齢は一応の目安であり、論者によって若干の差異がみられる。子どもとは、最広義には、乳幼児期、児童期、青年期をいうが、本稿では、児童期と青年期前半を指すことにする。とくに、子ども問題の集約点でもある後者に焦点を当てていこう。

子ども論を深めていく時に、参照されるべき二つの研究の潮流がみられる。一つは、アリエス(Aries, Ph)の社会史研究で、子ども時代(childhood)が実は近代とともに形成されたものであり、近代の刻印がみられることを教えてくれる。二つは、子どもを異文化として捉え、純粋無垢な子ども、弱者としての子どもという見方を転換しようとする研究である。我が国では、本田和子の遊び研究、秋山さと子のユング深層心理学的な研究が代表的なものとして上げられる。

本稿の課題は、この子ども研究の成果を参考にしながら、現代の子ども社会の見取図を描こうとするところにある。そのために、①子どもの病理から出発して、②子ども集団、③子どもの生活構造、④子どもの生活基盤、さらに⑤現代社会へと各レベルを追って考察を進めていく。そして、子どものどこが問題であり、その背景は何かをできるだけ整理して述べ、最後に子どもの将来について若干の問題提起をしてみたい。

3. 一つの手がかりとしての現代の子どもの病理

(1) 少年少女非行の低年齢化・一般化[4]

今日の子ども理解は、子どもの問題行動・病理現象の把握から出発するものが少なくないが、本稿でも、これを一つの手がかりとしていく。ここでは、子どもの病理を、①少年少女非行、②発達の病理、③集団の病理に分けて考察しよう。

少年少女非行は時代を映す鏡でもあり、その時代の社会構造や病理が影を落としている。我が国の戦後40年間に限定してみても、次の三つの時期に区分されるように、大きく様変わりしてきた。（表1参照）

第一期（1945～59年）は、戦後の混乱――復興期に当たるが、食糧など生活必需品が不足するなかで食うため、生きるための非行が頻発した。窃盗・強盗が目立ち、主役は年長少年で、勤労少年ないし無職少年であった。彼らの多くが貧困家庭の出身であったこともこの時期の特徴である。

第二期は、高度成長期に当たり、産業化・都市化・学歴社会化と大きな社会変動を迎え、社会のひずみを背景にした価値葛藤型・反抗型の非行が主流を占めるようになる。暴行・傷害・恐喝・強姦など粗暴犯・性犯罪が増加し、交通犯罪も急増してきた。受験競争が激化するなかで、進学組において脱落者や学校不適応者が非行に走る一方で、就職組においても、地方から都市への集団就職者に代表される社会的不適応者の非行が目立った。

第三期は、低成長期に当たるが、物質的に豊かな社会で育った世代が思春期に起こす問題行動が急増してきた。万引・オートバイ盗・自転車盗などの窃盗や乗り捨て自転車の横領などの遊び型（初期型）非行、家庭内暴力・校内暴力などの反抗型非行、シンナー乱用・怠学などの逃避型非行というように非行内容は多様化した。非行の主役は低年齢化して中学生となり、女子も20%を占めるまでに増加してきた。また、両親健在者76%、生活程度「中」以上の者86%、学生・生徒の割合

表1　戦後非行史の各時期の性格

項目＼時期	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期
期間	(1945～59年)	(1960～72年)	(1973年～　)
社会変動	戦後混乱―復興期	高度成長期	低成長期
非行内容	窃盗・強盗の割合大	粗暴犯・性犯罪の割合増大	窃盗・横領の割合大「初期型非行」
この期に目立った(盗)	貧しさ故の盗み	→	万引・自転車盗・バイク盗
非行のタイプ(暴)	年長少年の粗暴犯	粗暴犯増加	家庭内・校内暴力 年少少年の暴力化
(性)	―	暴力的性非行増加	性非行の拡散
(その他)	ヒロポン	すいみん薬／暴走族・シンナー乱用	→ つづく
非行の主役	年長少年(18・19歳)	中間少年(16・17歳)	年少少年(14・15歳)
非行の生じる「場」	実社会で	実社会と保護圏の境界	保護圏内とその周辺
非行の起きる位相	青年期の出口 学卒後	青年期の真中 就学と就労の間で (高校段階)	青年期の入口 在学中 (中学段階)
非行文化の主調	急性・犯罪者型	葛藤型	逃避型
社会のインパクト	外界(生活環境)	社会的自己	個人的自己
問題の性格	犯罪問題 →		← 教育問題

松本良夫『図説・非行問題の社会学』光生館　1984年　46頁、52頁を合成。

81%（1979～80年）と非行の一般化が第二期より一層顕著となった。主要刑法犯の少年非行率、（人口千人比）の最高をみると、第一期12.1%、第二期12.0%に比して、第三期は18.8%（1983、84年）と極めて高くなっている。[5] しかし、それは思春期という発達の危機に起こす一過性の問題行動の増加によるところが大きい。その危機の深さに違いはあれ、教育問題として適切な援助がなされば、立ち直るケースが多いのである。

(2) 子どもの発達の病理としての自閉化と攻撃化

1970年代に入って、子どもの発達の病理が様々に指摘されるようになった。落ちこぼれ問題は言うに及ばず、からだのおかしさ、心身をめぐる病理現象、問題行動などはかなり一般化しており、特定の個人に特定の環境の下で発生するとは言い難くなっている。からだのおかしさでは、土ふまずの形成の遅れ、ケガ・骨折の増加、手先の不器用さから、肩こり、体のだるさ、さらには内臓疾患の増加もあげられている。心身をめぐる病理現象では、中高生にみられるイラツク・ムカツクといった抑圧された心身、頭が重いとか、胸がドキドキするといった類の不定愁訴や思春期やせ症などの心身症、無気力症などがみられる。問題行動では、自殺、登校拒否、家庭内暴力、校内暴力、いじめ、怠学などが代表的なものである。

これらの発達の病理現象には、多様な内容、多様なレベルのものが含まれており、とうてい一括して論じることはできない。しかし、少なくとも次の点は指摘できよう。第一に、病理現象の発生時期は、第三期の少年非行と同じく、発達の危機である思春期に集中しており、次いで小学校高学年に多い。第二に、子どもの生きる社会が、発達基盤としては様々な問題を抱えており、子どもに

かなりな緊張と葛藤を強いている。病理現象は、子どもが不適応（逃避や逸脱）に陥ったり、過剰適応したりした場合に起こるシグナルである。と同時に、子ども社会のひずみを映す鏡でもある。

第三に、思春期に入っても自己中心性から脱却できず、自己のなかにもう一人の自分（内なる他者）を形成できない危機に直面した時に起こる病理現象が少なくない。この場合、人間関係から逃避して自己を閉ざしたり（自閉化）、逆に他者や自分自身に対して攻撃的行動をとったりして（攻撃化）、無意識的に未成熟な自我を防衛しようとするのである。たとえば、家庭内暴力は、登校拒否を伴う場合が多いが、家庭に閉じこもり、最も身内である母親などに攻撃的行動をとる。そこでは、暴力の激しさにも関わらず、親からの自立という発達課題が回避され、母親への甘えと反抗というアンビィバレントな心理が併存しているのである。近年、身長・体重などの量的発達や性的機能などの成熟現象が加速的に早まる発達加速現象がみられる一方で、自我の未成熟や社会性の未発達、文化としてのからだの未発達など発達遅滞現象も同時にみられる。こうしたなかで、現代の子どもは深層心理において社会に対して自己を閉ざしたり他者に対する攻撃衝動を秘めたりする性向をもっているのではないだろうか。激しい緊張と葛藤を強いる現代社会において、子どもの自我は自閉と攻撃のはざまで揺れ動いているのである。

(3) 子ども集団の病理としての孤立化と過剰同調

子どもの発達の病理とともに、子ども集団でも大きな変化がみられる。子どもの人間関係は自我の発達につれて、①家族兄弟、②遊び仲間、③学校の友人（同性からやがて異性へと広がる）、④地域社会の知人へと拡大されていく。思春期には一時閉鎖的になるが、一般に年齢とともに人間関係は豊富となり深まっていく。（表2参照）
しかし今日では、遊び仲間に顕著なように、はっきり孤立化の傾向が窺える。

表3は、遊び集団の変化を示したものである。戦時中の1942年には2～5人が男64.4％、女73.3％と多数を占めており、小規模集団であった。戦後初期の1949年には、2～5人が男52.1％、女56.3％、と減少し、逆に6人以上が男41.7％、女37.2％と大幅に増加しており、集団規模は大きくなった。また、男女差もほぼなくなった。しかし、高度成長期に当たる1963年には、2～5人が男79.1％、女92.6％と急増し、集団の小規模化が女子を中心に進んできた。今日ではさらにこの傾向が進んで、2・3人や一人遊びが増加して

表2　交友関係の特徴

	幼児期	児童期	青年期
特質	遊びの友だち	生活の友だち	心の友
意義	社会的訓練に役立つ	社会的訓練、集団への所属性	人格的影響を及ぼしあう
選択	だれとでもなりうる	選択的になる	厳選する
契機	遊びなどの接触	接触度と好ましい行動特性	人格的尊敬と共鳴
持続性	場面的性質が強く、変わりやすい	やや安定	生涯の友となるほど持続する可能性
性	男女未分化	反発・分離	異性への憧憬、恋愛への発展

沢田慶輔編『青年心理学』東大出版会、1966年。

表3　遊び集団の大きさの変化　単位：％

時期 / 人数	1942年		1949年		1963年	
	男	女	男	女	男	女
1人	6.3	8.3	6.1	6.4	5.4	4.8
2～3人	37.6	51.9	27.1	28.1	}79.1	}92.6
4～5人	26.8	21.4	25.0	28.2		
6～7人	13.7	10.2	15.9	17.8	}13.3	} 2.2
9～10人	6.1	3.2	9.7	9.4		
10人以上	9.5	5.0	16.1	10.0	1.9	0.6

注　1）1942年調査は、青木誠四郎『児童生活の実態』朝倉書店
　　2）1949年調査は、小川太郎『日本の子ども』新評論
　　3）1963年調査は、名古屋市『小学生児童の遊び調査』

いる。[6] また、集団構成をみると、地縁による異年齢で多様な能力の集まりから、同年齢・同学級さらには同能力の集まりへと同質化してきた。異質な人間との接触の機会が極めて少なくなっているのである。この遊び仲間の孤立化は、次のような遊びの内容・場所・時間の変化を伴っている。

遊び内容では、主役はテレビやゲーム・マンガに移り、伝承遊びは衰退した。遊び場所は、あき地や原っぱがなくなったり、道路の危険性が大きくなったために、屋外から室内に移行した。また遊び時間は全体として大きく変わらないが、テレビ視聴が長く、塾・おけいこごとで細切れにされている。こうして、現代の遊びは群れ型から孤独型へと変化したのである。[7] その結果、遊ばない子や遊べない子が増えている。

また、学校・学級の仲間関係をみると、小学生では浅く広いつきあいが好まれ、互いの協力や援助を忌避する傾向にある。中学生は親友関係が出来る時期であるが、関係の深まりよりも孤立化の傾向がみられる。また、少数の者は、非行性を帯びたツッパリ・グループや非行集団に引き寄せられたりもする。しかし、その集団は意外に組織性が低く、人間関係も強いものではない。

この子ども集団の孤立化と並んで、過剰同調がみられる。小学校高学年から中学生にかけて、小集団への準拠性が高まり、仲間への同調行動が強まる。この仲間集団は親から自立し、社会的自我を形成していく上で重要な支えとなるものである。けれども、集団いじめに窺えるように、この同調行動は病理的なものになっている。

最近のいじめは、一般化、集団化、長期化、陰湿化、正当化として特徴づけられるが、代表的なものとして集団的無視（シカト）をあげることができる。これは、いじめられっ子に対して学級全員が全く口を聞かない、関わらないといった形で完全にその存在を無視する方法であるが、これが行われるためには、次のような集団力学が必要となる。第一に、学級において異質な者をスケープ・ゴート化し、その正当化をはかる（異化作用）。第二に、いじめに直接加担する者だけでなく、その他の者がそれを積極的に是認したり、暗黙の支持を与えて同調行動をとる（同化作用）。[8] この両作用によっていじめは強化されるのであるが、強者―弱者の論理に支配された同調行動は、自己の不安を高め、決して自立の支えとなるものではない。このように、学級集団における孤立化と過剰同調は表裏一体ともいえる。

さらに、集団いじめの深層には未成熟な自我の弱さと不安定な攻撃衝動が潜んでいる。弱い自我は、自尊心や自己評価が低く、良心、自我および衝動の統合度は低い。そのため集団の圧力に対して服従し、過剰同調をとるのである。また、いじめっ子グループの攻撃行動は、表層では遊び、ふざけであるが、深層では不安定な攻撃衝動に突き動かされており、ある時点で本気になり、エスカレートすることが多い。これらは、アドルノ (Adorno, T.W.) たちのバークレー研究（『権威主義的パーソナリティ』1952年)が明らかにした、ファシズムの心理的基盤としての権威主義的パーソナリティの深層メカニズム――弱い自我、不安定な衝動、抑圧、敵意、置き換え、投射、同一化など――と触れ合う部分が大きいのである。いじめにおける人権感覚の低さはこのことと密接な関係にあるともいえるが、今後の解明に待たねばならないだろう。

子ども集団の孤立化と過剰同調の傾向は、子どものアイデンティティ（自己同一性）の確立を妨げ、混乱させるものとなろう。なぜなら、アイデンティティは、他者との豊かな関係において、また関係の深まりを通して現実化されるのであるから。[9]

4. 子どもの価値規範と文化

子どもの病理が大人から種々指摘されているが子ども自身はどのような意識・規範・文化を形成しているのだろうか。各種の調査からは、子どもは勉強ができる―できないという基準に強く支配されており、内面を蝕まれていることが知られる。

深谷昌志によれば、[10] 学業成績の良し悪しという価値を過大視する「成績崇拝」が、小学生、中学生、高校生に広まっている。しかも、成績の良さは未来を規定するものであり、それは努力に支

えられる。そのためには、テレビやマンガをがまんしたり、睡眠時間やクラブ活動や遊び時間を制限する禁欲的態度が求められる。しかし、この素朴なガンバリズムは中学生ともなると破綻してくる。成績に自信をもてない生徒が増え、彼らは学業だけでなく全般的に努力する態度そのものを放棄してしまう。つまり、現在の自分に失望するとともに、将来の展望も喪失してしまうのである。そして、唯一しあわせな家庭を築くことに望みを託すようになる。こうして、従来高校生にみられた無気力や反学校文化が低年齢化して、中学生にも広がりをみせている。

秦政春によれば、[11] 中学生の生徒文化は、学校システムに適応—不適応というⅠ軸と、仲間志向—孤立志向というⅡ軸とから抽出できる、充足型、勉強重視型、逸脱型、無気力型の4類型に分けられる。

充足型は、学校は楽しく、クラスに親しみをもっている。クラブに加入し、受験勉強にも積極的である。また、友人グループをもち、父親とも話す機会をもっている。現状によく適用しているタイプで、全体の28.6％を占める。勉強重視型は、勉強に対してやる気があり、テストによる評価について肯定的である。けれども、異性の友人がいないことをはじめとして、人間関係に積極的ではない。いわゆるマジメ派で、全体の26.7％を占める。

逸脱型は、学校をさぼった経験があり、しばしば学校に行きたくないと思っている。また、カンニング、喫煙、無断外泊などの経験がある。学校の規範からかなり逸脱しているが、異性の友人をもつなど仲間関係には積極的である。このタイプは全体の23.8％を占める。無気力型は、勉強や受験に対してやる気がなく、クラブにも加入していない。また、友人・親友がおらず、父母とも話しをしない。このタイプは全体の20.9％を占める。

学校システムに不適応な逸脱型と無気力型は全体の44.7％を占め、孤立志向の勉強重視型と無気力型も47.6％と過半数に近い。中学生の生徒文化の病理の深さが読みとれる。さらに、表4をみると、学業成績の下位の者では、逸脱型28.9％、無気力型24.0％と上位、中位の者より不適応が

表4　中学生の生徒文化（X県、昭和54年、中学校3年生）

単位：％

個人的特性 ＼ 生徒文化		無気力型	逸脱型	勉強重視型	充足型	計（N）
学業成績	上位	18.3	15.9	35.1	30.8	100.0 (504)
	中位	18.9	23.1	26.9	31.1	100.0 (655)
	下位	24.0	28.9	21.7	25.4	100.0 (870)
中学校卒業後の進路（進学する高校カテゴリー）	普通高校大学進学率80.0％以上	18.7	15.1	41.0	25.2	100.0 (139)
	普通高校大学進学率60.0～79.9％	18.5	19.4	30.4	31.8	100.0 (682)
	普通高校大学進学率60.0％未満	13.8	30.1	23.2	32.9	100.0 (319)
	職業高校	24.3	27.1	22.6	26.1	100.0 (824)
	不進学	44.6	15.4	27.7	12.3	100.0 (65)
全体		20.9	23.8	26.7	28.6	100.0 (2029)

秦政春「現代学校の選抜機能と生徒文化」福岡教育大学紀要第30号（教職科編）1980年　74頁。

多い。また、中学校卒業後の進路では、無気力型は不進学者で44.6％と極めて高くなっており、逸脱型は普通高校の非進学校30.1％、職業高校で27.1％と他より多くなっている。つまり、低学力の者ほど不適応が目立ち、自己に対して否定的評価を下し、自己をとりまく生活現実に対する無気力感、いらだち、反抗が顕著である。そして、偏差値によって振り分けられる乾ききった単調な未来に対する絶望感をいだいているのである。

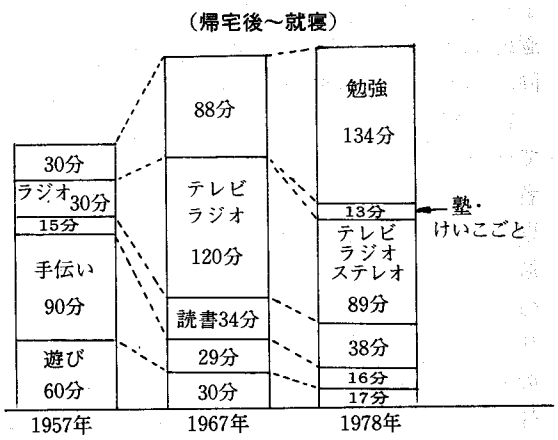
子どもが、学校の成績の良し悪しという一元化された価値規範に呪縛されていることは明らかである。しかも、この病理は高校生から中学生へ、さらには小学校高学年へと低年齢化してきている。一方では、学校規則の順守―逸脱による良い子―悪い子という価値規範が揺らぎ、一部逆転現象もみられるのに対し、成績崇拝は学歴社会を背景に根強いものがある。これが、人間の多様性や豊かさを奪うものであることはいうまでもないが、この背景には、子どもの生活構造の変化によって、子どもが学校以外での活動場所を著しく制約され多様な生活回路を失ったことがある。

5. 子どもの生活構造の変化

子どもの生活構造は、高度成長期以降大きく変化してきた。それを見ていく時、基本的生活、労働、遊び、学習の四つの活動に分類することが有益である。[12] 基本的生活活動は、睡眠、食事をはじめとして、身のまわりの用事、休息など日常生活を行っていく上で必要不可欠なものである。労働活動は、生産労働への参加、子守り、家事手伝いである。遊び活動は、外遊び、内遊び、テレビ・ラジオ視聴、読書、趣味などを含む。学習活動は、体系的、継続的な学習を意味し、学校での勉強、家庭や塾での学習をいう。

まず、生活時間の変化をみよう。図1は、全国の中学生の帰宅後の生活時間を示したものである。1957年には、手伝いと遊びが大きな比重を占めていたが、1967年になると、テレビ視聴と勉強の時間が大幅に増加し、遊び時間は半減している。これに伴って就寝時刻も遅くなっている。1978年には、勉強時間がさらに増加し、その分、テレビ

図1　中学生の生活時間の変化



全国子ども劇場おやこ劇場連絡会『子どもの文化と環境』1979年。

視聴を制限する傾向が読みとれる。もちろん、これは全国平均であり、地域、階層、家庭による差異を考慮する必要がある。ただ、全体の流れとして、そうした差異が小さくなり、一般化の傾向がはっきり認められるのである。

さて、戦後における子どもの生活史は、先にみた少年少女非行の時期区分とほぼ対応するので、それに沿って素描しよう。第一期は、第一次産業が41.0％(1955年)を占める農業依存社会である。子どもは、戦前における生活のための過酷な労働から解放されたとはいえ、農作業や家業の手伝い、女の子にとっての子守り・家事手伝いは必須なものであり、年齢に応じて分担した。貧しさのなかで、子どもの欲求は抑えられてはいたが、夕方遅くまで群れながら遊ぶ子どもの姿が、各地にみられるようになった。「手伝いと外遊びの時代」である。

第二期では物質的に豊かな時代が到来し、子どもは消費の王様として大量消費文化にさらされ、テレビの面白さに引き込まれていく。家庭では、労働の機械化、生活の合理化のなかで「手伝いよりも勉強を」という風潮が強まり、中学生になると学校、家庭ぐるみで激しい受験競争に参加するようになる。「テレビと勉強の時代」といえよう。

この時期は、「現代っ子」論争で幕開きした点でも特徴づけられる。阿倍進は『現代子ども気質』

（三一新書、1961年）で、都市小学生の生態を次のように描写した。現代っ子は、①テレビやマンガが大好き、②お金にがめつい、③コマーシャルに敏感、④学校の勉強はともかく、遊びのセンス抜群、⑤時代の変化に対応して変り身速く、スイスイ生きている。これは、高度成長下の大量消費社会に自らたくましく適応していく肯定的子ども像であり、大衆社会現象を直接に反映するものであった。

この現代っ子をめぐる論争は深まらなかったがほぼ同時期に、東京都の足立一中の教師であった林友三郎は、都市中学生の疎外状況に直面して、集団づくりの実践を模索しており、『おとなは敵だった』（国土社、1962年)を著した。その中学生像は、現代っ子像とは対照的に、①生活意欲を喪失し、ゲルのように捉えどころがない。②将来の見通しをもたず、その場しのぎの気まぐれな生き方である。③受験のみの生活で、新立身出世主義に染まり、頼むは自己の力のみと考え、優越感が強く集団を蔑視している。④こうした生活の目標・意欲・スタイルを見失っている中学生の背後には、高度成長に取り残された下町の中小企業で生きる親たちの目標喪失がある。ここにみられるエゴイズムとニヒリズムへの傾斜は、今日まで引き継がれてきたのではなかろうか。

第三期になると、勉強の圧力はさらに強まり、従来の発達課題に代って、入試による能力証明という新たに課題が意識されるようになる。学習塾やおけいこごとに通う割合が高まり、テレビ視聴にも一定の禁欲的態度をとるようになる。子どもの生活は多忙となり管理化され、欲求はコントロールされるようになった。小学校高学年になると子どもの遊ぶ姿はほとんど見かけなくなり、閉ざされた空間で「勉強とテレビの時代」を過ごすようになる。こうして、子どもは自然・労働・人間から隔離され、生活体験は貧しくなる一方で、マスメディアを通した擬似体験は増加している。

6. 子どもの生活基盤としての学校化社会

子どもの生活基盤は、家族、地域、学校、情報環境の四つである。これらは、子どもの学習・発達の基盤でもあるが、今日いずれも大きな問題を孕んでいる。

第一に、家庭は子どもの生活の拠点、発達の拠り所である。核家族化が進み出産児数が2人前後に減少するなかで、父親の存在感が小さく、母親と子どもが情緒的に緊密化し、子どもの自立を妨げる傾向にある。とくに、母の子に対する支配（過保護)、あるいは服従（溺愛）は思春期に到って、問題を顕在化させる場合が多い。他方、父母間の不和や離婚などで放任の場合もあり、非行少年少女の6割強はこの養育タイプである。また、しつけが母子関係に封じ込められてしまった現在、その重さに耐えかねて放任したり、塾や学校へ委任する傾向もみられる。しつけの伝統的価値観が崩壊するとともに、生産労働を通してのしつけが、不可能になったことが主な原因である。

第二に、地域は産業化、都市化のなかで、共同体としてのまとまりを著しく喪失した。子ども組、若者組、娘組という地域共同体に支えられた制度としての子ども社会は崩壊してしまった。また、地域での遊び仲間集団も群れ型から孤独型へと移行し、遊び自体も貧しくなってきた。

第三に、学校は教育の大衆化、学歴社会化を背景に、社会的選抜機能を肥大化させ、教育機能に障害をもたらしている。学校の序列・選別原理が子どもの内面を深く支配するようになったが、一方で、反学校文化が急速に広がりをみせている騒然とした状況にある。

第四に、情報環境は、テレビ・ラジオ、漫画、ファミコンなどのメディアの発達によって拡大してきた。子どもの接触度は極めて高く、知識伝達の面でも学校をおびやかす存在となるほど影響力は大きい。

以上のように家庭や地域の教育力が衰弱する一方で、学校の機能と役割が肥大化してきた現在、子どもは学校の制度や規範が日常生活の隅々にまで及ぶ学校化社会に囲い込まれてしまったのである。また、マスコミ環境の拡大は、子どもの感性、意識、価値観に大きな変化をもたらすことになろう。

7. 子ども社会の存立基盤としての現代社会

(1) 転換期としての現代社会

現代社会は、1960年代の産業化、都市化、大衆化から1970年代になると情報化、管理化へと急激に変動している。しかも、世界的に構造的不安定期にある今日、各国間、企業間、個人間の利害は鋭く対立しており、職場における労働強化、メリットクラシー原理による選別強化が進行している。大人にとっても、ストレスを蓄積させやすく、生きにくい社会となってきている。

この社会構造の変動は、近代社会の基本原理の解体、再編成という時代の転換期を予感させるものである。1960年代後半から近代思想・世界観の崩壊が指摘されてきたが、人々の生活様式や社会規範のレベルにおいても解体・再編成が深部において進行しているのではなかろうか。事態は混沌としているが、近代の基本的意識形態であるエゴイズムとニヒリズムの矛盾が一層顕在化してきていることは疑いえない。子ども社会の病理は、この社会規範の混乱、矛盾を背景としているが、その構造やメカニズムは捉えにくい。

(2) 現代の子ども社会の見取図

現代の子ども社会を解読することは、だれにとっても容易ではない。これまで述べた子ども社会の認識もまた、十分な広がりと厚みをもっているとは言えないが、現時点における私のささやかな問題提起である。その内容を一覧表にしたのが、表5である。

表5　現代の子ども社会の見取図

社会的レベル	現代的特徴	意識・規範・文化
Ⅴ　子どもの病理	アイデンティティの拡散・喪失、自我の未成熟 自閉と攻撃のはざまで揺れ動く →逃避と逸脱	自己評価の低下、内面規範の混乱（現在の自己を否定、将来の展望を見失う） →エゴイズムとニヒリズムの侵食
Ⅳ　子ども集団	小規模化・同質化、浅く広いつきあい 遊び集団は群れ型から孤独型へ ツッパリグループ、いじめの集団化 →孤立化と過剰同調	知識不信と感性重視、リアリティの欠如、交信能力の低下 →モノゴトのゲーム化・パロディ化、シラケる、反学校文化の形成、非行文化の浸透
Ⅲ　子どもの生活構造	勉強とテレビ、青年期の延長 自然・労働・人間との関係の抽象化 生活体験の貧困化・擬似体験の増大 発達課題の不明確化・入試による能力証明という新しい発達課題 →全般的管理化	学校原理への過剰適応と逸脱 マスコミ文化、大量消費文化の浸透 →多様化のなかの画一化
Ⅱ　子どもの生活基盤	学校化社会への囲い込み 家庭・地域の機能低下、学校原理の優位化 情報環境の拡大	学校の序列・選別原理の支配
Ⅰ　現代社会	転換期における社会変動・社会矛盾 産業化、都市化、大衆化、情報化、管理化 日本社会の特殊性（日本的集団主義）	近代思想・世界観の崩壊 社会規範の混乱、エゴイズムとニヒリズムの深化

注）社会的レベルのⅠからⅤの順に、基底的—表層的というヒエラルヒーをなしており、下位の要素が変化すれば上位の要素に波及するが、逆の場合は必ずしもそうならない。

学校化社会に囲い込まれた子どもは、これまで保持してきた自然・労働・人間との多様な交信回路を切断される一方で、大量の情報にさらされている。子どもは、この現代的状況におだやかに適応する一方で、そこからの脱出口を求めて試行錯誤を繰り返している。その意識と行動には、未来社会を生み出す新しい芽が潜んでいるに違いないが、私たちはとかく否定的現実に目を奪われがちである。自閉と攻撃のはざまで揺れ動いている子ども、孤立化と過剰同調を強いる子ども集団という認識もまた、教育の病理を強調することに止まっているといわざるをえない。子どもの新しい知性・感性とは何か、そしてそれは閉塞的な学校化社会から自らを解き放ち、自立と連帯のネットワークを形成することを可能とするだろうか。

8. 子ども時代の行方

子どもの将来を見通し、理論的・実践的課題を明確にする上で、近代の刻印を押されている子ども時代の成立史をみておくことは、必要不可欠である。

アリエス（Aries,Ph）によれば、[13] 中世では大人と子どもとの区別がなく、乳幼児期を過ぎて7歳になれば、「小さい大人」として大人の仲間入りをした。仕事や遊びを大人と共にしながら、生きていくための知識技術を獲得していったのである。そこでは、子ども時代の観念はなく、大人は一般にその存在に対して無関心であった。

16世紀後半から17世紀にかけて、近代家族の成立に伴って子どもの可愛らしさ、純真さ、ひょうきんさに関心が向けられ、大人の楽しみと慰めの対象とされるようになった。アリエスは、これを「可愛がり」の態度と呼んで、子ども期についての最初の概念であるとしている。17世紀には、第二の概念が、教会関係者、モラリスト、教育者たちによって創られる。彼らは、子どもを純粋無垢な存在としてではなく、神の手になるまだ壊れ易い存在であり、理性に導かれた思慮深い大人、立派なキリスト教徒に育成されるべき存在と見なした。

18世紀になると、この二つの子ども観―すなわち、純粋無垢な神の被造物としての子ども観および徳育と再形成の必要な存在としての子ども観が家庭の内部で融合されるようになる。さらに、子どもの衛生や身体の健康についての配慮が書物の中に表われてくる。子どもは特別な地位を与えられ、子どものための服装、絵本、玩具が現れ、遊びやゲームは子どもに委ねられるようになる。19世紀に入って、児童労働が制限され、初等教育が普及し義務化されるにつれて、子どもの地位は向上し、子ども期は延長されてきた。近代における子どもの歴史は、生産労働からの解放、発達可能態という被教育者としての役割強化の歩みであったといっても過言ではない。

しかし、近代社会の転換期に当たる今日、大人と子どもの境界が少しずつ崩れつつある。一方では、大人にならない若者が増加して、青年期は30歳前後まで延長され、子どものような大人が出現してきた。他方では、子どもは早くから競争に追い立てられ、また大量の情報を受容するようになった結果、意識や行動様式において大人との差異は小さくなってきている。大人のような子どもの出現であるが、ポストマン(Postman, N) の警告するように、これが子ども期の消滅につらなるものかどうかは速断できない。[14] 子どもと生産労働との関わり、学校での被教育者としての役割が、どのように変化するかが基本問題なのである。そして、子ども時代の社会史研究が明らかにするように、今日、問われるべきは、発達可能態としての子どもの問題に止まらず、子どもと大人の関係の有り様なのである。

（註）

1）山根一眞『変体少女文字の研究』講談社、1986年、35頁。

2）山根一眞、同上書、115頁。

3）笠原嘉『青年期――精神病理学から』中公新書、1977年　第6章。

4）主として、次の文献を参照。

- 松本良夫『図説・非行問題の社会学』光生館、1984年。

- 福島章『非行少年心理学』中公新書、1986年、
- 山口透『少年非行学』有信堂、1984年。
- 星野周弘『社会に背を向けた子どもたち』東京法令出版、1982年。

5）福島章、前掲書、95～101頁。
6）深谷昌志『遊びと勉強』中公新書、1976年
深谷昌志『孤立化する子どもたち』NHKブックス、1983年
7　深谷昌志、1983年、前掲書、第一章
8）森田洋司・清水賢二『いじめ――教室の病い』金子書房、1985年参照。
9）レイン、R.D, 笠原嘉・志貴春彦訳『自己と他者』みすず書房、1975年
10）深谷昌志、1983年、前掲書、第五章
11）秦政春「現代学校の選抜機能と生徒文化」福岡教育大学紀要30号（教職科編）、1980年
12）小川太郎『日本の子ども』新評論、1960年
13）アリエス、杉山光信・恵美子訳『＜子供＞の誕生』みすず書房、1980年参照。
14）ポストマン、小柴一訳『子どもはもういない』新樹社、1985年　参照。

（主要参考文献）

1）『世界子どもの歴史』全11巻、第一法規、1984－86年
2）山口昌男他『挑発する子どもたち』駸々堂1984年
3）本田和子『異文化としての子ども』紀伊国屋書店1982年
4）本田和子『子どもたちのいる宇宙』三省堂1980年
5）本田和子『子どもの領野から』人文書院、1983年
6）秋山さと子『母と子の深層』青士社、1981年
7）村瀬学『子ども体験』大和書房、1984年
8）毛利子来『新エミール』筑摩書房、1979年
9）柳田国男『子ども風土記』角川文庫、1960年
10）宮本常一『日本の子どもたち』未来社、1975年
11）大藤ゆき『子どもの民俗学』草土文化、1982年
12）小川太郎『日本の子ども』新評論、1960年
13）仙田満『子どもの遊び環境』筑摩書房、1984年
14）深谷昌志『孤立化する子どもたち』NHKブックス、1983年
15）藤本浩之輔『子どもの遊び空間』NHKブックス1974年
16）高山英男・日高六郎編『現代子ども誌』筑摩書房1982年
17）住田正樹『子どもの仲間集団と地域社会』九州大学出版会、1985年
18）麻生誠・木原孝博編『子どもはどう育つか』有信堂、1985年
19）スタジオ・アヌー編『子供ノ』昌文社、1985年
20）村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』講談社文庫、1984年
21）多賀たかこ『はいすくーる落書』朝日新聞社、1985年